論文の和文要旨	
論文題目	現代日本語の始動の意味を表す複合動詞の意味と機能 －「－ハジメル」、「－ダス」、「－カケル」－
氏　名	朴　敏　瑛

本稿は、「－ハジメル」、「－ダス」、「－カケル」を中心に、現代日本語の始動の意味を表す複合動詞の意味及び機能について考察したものである。

「動詞＋動詞」の複合動詞の構成要素のうち「－ハジメル」、「－ツヅケル」、「－オワル」のような後項動詞は、「局面」をとりだすが故に、「局面動詞」と呼ばれる。そして、このような「局面動詞」を後項動詞とする複合動詞は、語彙範疇（アクツィオーンスアールト Aktionsart）として、文法範疇（アスペクト aspect）からは区別されている。

これまで「局面」に関しては単に「過程の部分」と定義されることが多かったが、本稿では「局面動詞」によってとりだされる「局面」が、単なる「過程の部分」ではなく、過程のどの段階に焦点が当てられるのか、「話し手」の捉え方によって左右されることに注目したい。これは、話し手の視点、または焦点が変われば、とりだされる「局面」も変わってくることを意味する。このように解釈すると、例えば、複数の「局面動詞」が同じ「局面」を言い表す場合でも、それぞれの「局面」がとりだされる過程、話し手の視点や焦点の置き所は必ずしも一致しない可能性を引き出すことができる。

本稿の「－ハジメル」、「－ダス」、「－カケル」の意味考察は、この仮説に基づいている。つまり、この三つの形式は「始動」の意味を表す点では共通しているが、それぞれの「局面」がとりだされる過程、言い換えれば、特定の出来事の内的な時間的構造に対する話し手の捉え方は各々の局面動詞によって異なっているというのが本稿の考えである。

以上のような立場から、本稿では「ーハジメル」、「ーダス」、「ーカケル」によって表される始動の意味を次のように定義する。

(1)「ーハジメル」

「ーハジメル」によってとりたてられる運動の始まりには、開始後しばらくは続くことが示される。これは「ーハジメル」によってとりだされる始動の局面が、内的な時間的構造全体を前提としていて、その中の一部分として位置づけられているからである。すなわち、「始まりー中ー終わり」という内的な時間的構造からとりだされた「始まり」の部分だからこそ、「ーハジメル」によって言い表される始動の「局面」においては内的な時間的構造の次の段階(「中」)へのつながりが潜在的な線としてふくみこまれるのである。本稿ではこのような「ーハジメル」の意味を<何らかの持続をふくみとした始まりの局面>と規定する。

そして、「ーハジメル」の意味にふくみこまれている次の運動の段階へのつながりは、「ーハジメル」がどのような動詞と結びつくのか、接続する前項動詞の語彙的な意味によって異なってくる。例えば、前項動詞が「動作動詞」の場合は「動作の継続」へと、前項動詞が「変化動詞」の場合は「変化の達成」へと、前項動詞が「状態動詞」の場合は「状態の継続」へとつながっていく始動の局面がとりたてられる。「ーハジメル」によって表される始動の局面が常に動的な事柄としてさしだされるのもこのためである。

また、「ーハジメル」は、「くりかえし」の運動を表すさまざまな構文の下で、「くりかえし」における最初の段階を特徴づけることもある。「くりかえし」の場合、「ーハジメル」のふくみとなる「持続性」は、「くりかえし」という語そのものが意味する個別的な運動の連続として具現される。

いずれにしても、何らかの「持続性」が「ーハジメル」の意味のふくみとなっていることに変わりはない。この「持続」をふくみとしているからこそ、「ーハジメル」は、個別的な運動においては、次の運動の段階へとつながっていく始動の局面を言い表し、「くりかえし」の運動においては、連続的に行われる持続過程の最初の段階をとりだすことができるのである。

(2)「ーダス」

「ーダス」の表す始動の局面の前提となっているのは、「ーハジメル」に見られるような「始まりー中ー終わり」の一連の過程ではなく、出来事のありかた自体の変化である。つまり、一つの運動が「無い(存在しない)」状態から、「有る(存在する)」状態へと転換する、状態変化のモメントそのものに焦点がある。

これには「ーダス」のもとの動詞、「出す」の表す「内から外への移動」という語彙的な意味が密接に関わっている。具体的にいえば、自立語「出す」の持つ「内から外へ」という方向性が、局面動詞「ーダス」においては「無から有へ」という状態の変化へと、形を変えて受け

継がれているのである。本稿では、このような局面動詞「ーダス」の意味を＜内発的な発生、出現の局面＞と定義する。活用や接続の面などにおいて「ーハジメル」との違いが生じる所以でもある。

以上のような考え方から、これまで「ーダス」の意味特徴として言われてきた「自然性、無意志性、突発性」についても、本稿では、「ーダス」が＜内発的な発生、出現＞を特徴づけることによって生じる付加的な意味として、「ーダス」の基本的な意味ではないとする。

(3)「ーカケル」

本稿では、先行研究における「始動態」と「将現態」との二元的な捉え方を否定し、局面動詞「ーカケル」の表すアスペクチュアルな意味を限界に達成されていない＜限界達成の（直）前の局面＞と定義する。

「ーカケル」が「将現、始動、途中」などの様々な局面としてさしだされる理由は、ここにある。いずれも＜限界達成の（直）前＞という点では共通しており、限界にさえ到達していなければ、どちらにもなり得るのである。

従って、「ーカケル」が接続する際の焦点となるのは、前項動詞の語彙的な意味にふくみこまれている「限界」である。「ーカケル」の用例を見ると、瞬間動詞の場合には「始まりの限界」が、継続動詞の場合には「始まりの限界」と「終わりの限界」の両方が問題となり得る。

「ーカケル」の表す意味のもう一つの特徴は、「中断、中止」の意味が伴われることである。考察の結果、この「中断、中止」の意味が強調されるのは、前項動詞が「動作動詞」の場合が多くて、前項動詞が「変化動詞」の場合や後項動詞「ーカカル」では、「動作動詞」に内包する「意図」を欠いていることから、必ずしも「中断、中止」の意味は表されない。

結論的にいえば、「ーカケル」によって表されるアスペクト的な意味は、＜将然相 prospective Aktionsart ＞であって、「ーハジメル」の表す＜始動相 inchoative Aktionsart ＞とは区別すべきである、というのが本稿の主張である。

第Ⅱ部で考察しているのは、「ーハジメル」などの始動の意味を表す「局面動詞」のテキストにおける機能についてである。特に、本稿では、「時間」と「変化」の二つの観点から、始動の意味を表す複合動詞の機能を検討している。

まず、「時」という観点からは、1）始動の局面をとりたてることによって特定の運動の開始時間が特定されることが多いこと、また、2)「ーハジメル」によって特徴づけられる始動の局面は、特定の運動の内的な時間構造における一局面ではあるが、時間の流れの中で隣接するほかの出来事の時間的なありかとも密接な関わりを持っていることから、「開始時間」や「時間関係」を強調する時に使われると言える。

次に、「変化」という観点からは、一つの運動のありかたの変化として、「開始」という局

面そのものや「開始する運動」そのものが注目される時に使われることを見ている。

結論的に言えば、始動の局面をとりたてる「ーハジメル」のテキスト上の機能は、ほかの出来事との時間関係の中で、特に、特定の運動の出現に目を向けさせることによって、開始される出来事が、これまでの展開において、あるいは、これからの展開において、ほかの出来事と密接なつながりを持っていることを強調しているのである。